

6日目(8/20、木曜日)

夜中に屋根をたたく雨音で目が覚める。今日はいにく予報通りの雨。集合時間前のホテル1階ロビーには、高原を歩くための長袖、ヤッケ姿が目立つ。9時には24人そろって出発、ガイドは武田倫子さん。垂れ込めた雲と細かい雨、気温15度。何人かの晴れ女の存在をもってしても、ラックス高原は晴れそうにない。ウィーン市街を抜けるとバスは順調に走り出し、やがて雨と霧の合間から右側遠くに低い山が見え隠れする。1時間もすると端正な別荘地帯へ。やがて切り立ったがけの岩肌が見えて、Reichenau(ライヒェナオ)のTalstation(628m)に到着。



ケーブルカーの出発駅だ。数名の観光客と我々が乗り込むと満員。かなりの急こう配を木々すれすれに、霧とも雲ともつかないもやの中を登ること15分、ホテルBerggasthof(1,550m)に着く。ここにフランクル夫妻は部屋を借りて、ほとんど毎週末登山に出かけていたそうだ。私たちはそこからReichenau山麓をオットーハウス

Ottohaus(1,644

m)目指して緩やかな上りの砂利道を歩く。時折風が霧雨を頬にあてて冷たい。ほぼ全員が黙々と歩く。途中でエーデルワイスの白く小さな花をガイドさんが教えてくれて皆でシャッターを切る。およそ30分で到着。Ottohausは3部屋あり、何度か建てなおしたらしく、大きくてきれいだ。壁には古い山小屋やこの辺りを散策したというフロイトの写真も掛けてあった。昼食は肉の煮込み、ソーセージ、酢漬



けのキャベツ、丸パンをちぎって作ったお団子、パン、それにヌードル入りのスープと何とも量が多い。3ユーロ弱のワインやコーヒーも人気だった。周りは何も見えず、これ以上は危険とあきらめて下山となった。しかし皆の表情はなぜか満足げだ。前日のルーカス先生のミニ・ゼミにあった「アルプスの燃焼」の話思い出した。太陽が落ちる前の峰々は夕陽に輝き、暗い谷間は何も見えない。良い思い出だけを共有すればよいのだ。素晴らしい山なみは見えなかったけれど、30年前までフランクルが週末に妻エリーと足しげく通ったラックス高原の同じ道を、彼らを思いながら我々は歩いたのだ。それだけで十分な気がした。帰り道は乾き始めて、雲も切れ間がのぞいた。明日はきっと晴れるだろう。(NH記)



周りは何も見えず、これ以上は危険とあきらめて下山となった。しかし皆の表情はなぜか満足げだ。前日のルーカス先生のミニ・ゼミにあった「アルプスの燃焼」の話思い出した。太陽が落ちる前の峰々は夕陽に輝き、暗い谷間は何も見えない。良い思い出だけを共有すればよいのだ。素晴らしい山なみは見えなかったけれど、30年前までフランクルが週末に妻エリーと足しげく通ったラックス高原の同じ道を、彼らを思いながら我々は歩いたのだ。それだけで十分な気がした。帰り道は乾き始めて、雲も切れ間がのぞいた。明日はきっと晴れるだろう。(NH記)

